

2017年1月20日

九州整備局長 小平田浩司様

熊本県知事 蒲島 郁夫様

パブリックコメントに関する意見書

パブリックコメントの前提は住民が重視している事実を共有することから

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会

共同代表 緒方 俊一郎

岐部 明廣

私たちは、ダムによらない治水を検討する場が開催されることが決定された時点から繰り返し川にダムをもち込むことに異議を唱えた住民の声を意見書・要望書の様式で提出し続けてきた。しかし、住民の声は一度も会議の中で取り上げられることはなかった。一方的に国と県の考えを押し付ける会議に終始し続けてきた。にもかかわらず、住民に説明すらすることなくパブリックコメントを強行している。

パブリックコメントは住民が重視している事実を国・県が共有することで初めて生かされる。住民が重視している以下に述べる事実に関する議論を住民と行う場を設定することを強く求める。

最近、国は住民の防災意識の低下を問題にし、自らが引き起こしている治水事業の失敗を住民に転化しようとしている。もし、住民の防災意識を重視するのであれば、川を流域住民の暮らしに取り戻し、河川行政に流域住民が主体的に参加できる体制をつくるべきである。この意味においても、パブリックコメントと並行して、流域住民が重視する事実に関する議論をする場を設定すべきであると考える。

その1 脱ダムの原点になっている事実

球磨川に建設された荒瀬ダム・瀬戸石ダム・幸野ダム・市房ダム四つのダムが川をまるごと破壊し、甚大な水害を引き起こし、地域を衰退させてしまったという深刻な事実である。

その2 水害問題の原点になっている事実

国交省は昭和40年に発生した洪水が引き起こした水害だけを取り上げて議論をしているが、住民は昭和57年に発生した洪水は昭和40年の洪水より大きかったにもかかわらず、甚大な水害は発生しなかった

という事実を重視している。住民は、昭和 40 年人吉大水害は治水事業の失敗であるとみている。大雨や大水に原因があるとは認識していないのだ。

その 3 川の保全と流域の災害問題の原点になっている事実

球磨川水系の保全にとって一番重要な役割を果たしてくれているのは流域の山々（山林）である。昭和 38 年～40 年に多発した山腹崩壊や土石流の発生は奥山開発の名の基に推し進められた奥山開発である。この山腹崩壊や土石流は多くの人命を奪った上、川を土砂で埋め立て水害を引き起こす大きな要因にもなった。この事実は、現在においても全く解消されていない。

気象現象に伴って発生する災害を問題にする時、球磨川水系の流域においては流域の山々（山林）の実態が最重要の課題になるのだ。川と山は一体である。流域の安全・安心はここに原点がある。

なお、山の問題を森林の面積にすり替えて議論しているが、これほどお粗末な考えはないということを書き加えておく。

以上